
IS インフィニット・ストラトス 転生者と騎士王

朱雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 転生者と騎士王

【Nコード】

N9703Z

【作者名】

朱雀

【あらすじ】

オリ主がISの世界に転生する物語です。

文才が無い作者なので駄文と思いますがよろしくお願いします。

ブローグ

「閉じよ（みたせ）。

閉じよ（みたせ）。

閉じよ（みたせ）。

閉じよ（みたせ）。

閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

「素に銀と鉄。

礎に石と契約の大公。

祖には我が大師シュバインオーグ。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「
Anfang^{セット}」

「 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「 誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者。
汝三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ
「 !
」

「サーヴァントセイバー、召喚に従い参上した」

「 問おう

貴方が私のマスターか

主人公設定・IS設定

名前 魔桐 霧夜
年齢 15歳
身長 173?
体重 67?
趣味 読書 料理
好き 友達 甘い物
嫌い 仲間を傷付ける奴
専用IS 『セイバー』
瞳 黒
髪 黒髪のロング
装備品 ナイフ

転生者で、白騎士事件から三年後にサーヴァントを召喚して、契約する。

サーヴァント召喚の一年前には、両親が事故で死亡。その後、衛宮切嗣に引き取られ、サーヴァントを召喚した一年後から原作開始前日まで世界中を旅する。運動神経は千冬とほぼ同等。頭脳はコアの製造以外では束とほぼ同等。セイバーと契約した時に、右手の甲に令呪が宿っており、普段は包帯で隠している。

IS設定

機体名「セイバー」

世代 第一世代

機体カラー 青

AIのイメージキャラクター セイバー（Fate/stay night）

待機状態 ネックレス

セイバーが憑依したIS。レーザーサーベル以外の武装（宝具）は威力が高すぎるため、リミッターで威力を落としている。

世代は第一世代だが、スペックでは、第三世代以上、第四世代以下のスペックを持っている。

セイバーが実体化して、セイバー自身が戦う事ができるが、霧夜はその間セイバーが使用できなくなる。

使用時髪が金髪になり、瞳が緑色になる。

武装

《レーザーサーベル》

両腕を発振源とするレーザーサーベル。

《カリバーン（勝利すべき黄金の剣）》

真名解放することで、強力な一撃を繰り出す。

インヴィジブル・エア
《風王結界》

風の魔術で大気を圧縮し光を屈折させることで所持する剣を不可視にする第二の鞘。

《エクスカリバー（約束された勝利の剣）》

魔力を変換し絶大な出力の“光”の斬撃として放つ聖剣。現在封印されている。

《アヴァロン（全て遠き理想郷）》

真名開放でエネルギー系の攻撃を吸収し、自分のシールドエネルギーに変換する鞘。現在封印されている。

単一仕様能力

『真名解放』

武器に宿っている力を真名を言う事によって開放する能力。アヴァロン（全て遠き理想郷）以外はエネルギーを消費し、消費量が多い。

1話

「ここがIS学園か」

無駄にでかいなあい。

IS操縦者を育成する学園です。このぐらいが普通かと

「まあ、そうだけど。てか、千冬さん早く来ねえかな」

千冬さんが来ねえと入れないんだよ。一夏は別だけど。

「待たせたな」

「お久しぶりです。千冬さん」

「ああ。それより、お前は今までどこをほつき歩いていた？」

どこって、そりゃ

「師匠と世界中を」

パンツ！

「い　！？」

いきなり、出席簿で叩かれた。てか、どこから出席簿が！？まさか、四次元ポケットが

パンツ！

「私はそんな物は持ってない。行くぞ、すでにSHRが始まっている」

「はい」

そして俺は千冬さんについていった。

いきなりこんな話をするのはなんだが、俺は転生者だ。なんか知らねえけど、神のミスで死んで、お詫びにこの世界に転生した。

俺が転生者として、与えられた力は三つ。

一つ目は、IS適正。

二つ目は、俺の能力値の全ての底上げ。そのおかげで、コア以外なら作れる。

三つ目は、魔術の行使。サーヴァント召喚もその中に入る。

姉さんも転生者で、白騎士事件から一年後にサーヴァントを召喚して、失踪した。

「私が呼んだら入ってこい」

それだけ言っただけ千冬さんは、教室に入った。

セイバー、サーヴァントの気配は？

今のところはありません

そうか。来たら教えてくれ

はい

『最後に一人、紹介していない者がいる。入ってこい』

千冬さんに呼ばれたし、逝くか。

キリヤ、字が

気にするな

「失礼します」

教室に入って、一夏がすぐに見つかった。だって、最前列のセンターだからだ。

「魔桐霧夜だ。世界で二人目のIS操縦者だ。よろしく」

「「「……………」」」

なんだ？嫌な予感する。

「「「きゃ……………」」」

「？」

「「「きゃあああああーっ」」」

「静かにしろ！」

「「「……………」」」

一瞬にして、全員が黙った。スゲー……

「魔桐、お前の席はあそこの空いている席だ」

空いていたところは、窓側の一番後ろだった。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

チフユも相変わらずです

まあ、千冬さんらしいよ

パンツ！

あ、一夏が叩かれた。

「……………」

一時間目のIS基礎理論授業が終わって今は休み時間。けど、教室内の異様な雰囲気はなんとかして欲しい。

「よお、一夏」

「おう、霧夜。今までどこ行ってたんだよ」

「まあ、師匠と世界中をな」

「……ちょっといいか」

「え？」

「ん？」

突然、話しかけられた。女子同士の牽制に競り勝ったのでわなく、一人思い切って行動に出たようだ。

「……箒？」

「廊下でいいか？」

「行つてきな」

「お、おう」

一夏と箒は教室を出て行った。

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したISを運用した場合は、刑法によつ

て罰せられ」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。はつきり言って俺はもう教科書の内容を理解していて、暇なのだ。

キラヤ、イチカの様子が

ああ。あいつ、授業の内容わかってないな

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

一夏の様子がおかしいことに気づいた山田先生が、訊いてきた。

「あ、えつと……」

「わからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

やっぱりか

やっぱりのようです

「え……ぜ、全部、ですか……？」

山田先生の顔が困り度百パーセントで引きつった。

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

拳手を促す山田先生。しかし誰も手を挙げない。

「……織斑、入学前の参考書は呼んだか？」

教室の端で控えていた千冬さんが訊いてきた。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！

「必読と書いていてあったらろっつが馬鹿者」

一夏の脳細胞何個死んだんだ？

今ので二万五千個です

数えてたのかよ。

「魔桐、この馬鹿に覚えさせろ」

「了解です」

ハア、あいつしばらく見ない内によけいに馬鹿になってやがる。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「……………」

二時間目の休み時間。

一夏に用語の説明をしていたところに話しかけられた。

話しかけてきた女子は、金髪の地毛で、白人特有の青い瞳がやや吊り上がっている。如何にも『今』の女性の雰囲気を出している。

今の世の中、ISのせいで女性はかなり優遇されている。その優遇は最早行き過ぎていて、女子＝偉いという構図を当たり前としている女性も珍しくない。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ訊いているけど………どういう用件だ」

一夏が答えると目の前の女子はかなりわざとらしく声をあげた。

キリヤ、彼女は

知ってる。イギリスの代表候補生だったな

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんではな

いかしら？」

「「……………」」

こいつを一言で言うと鬱陶しい。

ISを使える。それが国家の軍事力になる。だからIS操縦者は偉い。そしてISを動かせるのは原則女しかない。つまり『女』偉い』という世界になっている。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「わたくしを知らない？この「セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生で第三世代型ISブルーティアーズのマスターだ」あら、そちらはお知りのようで」

「失せろ。貴様と話している時間はない。続けるぞ一夏」

「お、おう。霧夜、代表候補生ってなんだ」

「「「……………」」」

一夏の一言に俺やオルコット、聞き耳を立てていたクラス的女子がフリーズした。

「い、一夏……代表候補生ってのはな、国家代表IS操縦者の、候補生として選出されたやつのことだ。単語から想像できるだろ」

「そういわれればそうだ」

「そう！エリートなのですわー！」

フリーズから復活したオルコットがびしっと一夏に向けて指をさす。

「本来ならばわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

お前が幸運だって言っただろうが。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一、いえ、今は二人ですか？ どうでもいいですわね。少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、とんだ期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだか」

「ふん。まあでも？ 私は優秀ですからあなた達のような人間にも優しくあげますわよ」

この態度が優しさなら、この世界は優しさで満ち溢れていそくだ。

「ISのことわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてよくてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「入試って、あれか？ ISを動かして闘うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

一夏が言ったことは相当ショックだったのか、目を驚きに見開いている。

「わ、私だけだと聞きましたか？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ。氷にヒビが走ってような音が聞こえた。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」

「落ち着け」

「こ、これが落ち着いていられ」

キンコーンカーンコーン。

狙ってるんじゃないかと思わせるタイミングで、三時間目開始のチャイムが鳴った。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

二度と来るな。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違って、山田先生ではなく千冬さんが教壇に立っている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したように千冬さんが言う。説明によると対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席をしなければならぬ。しかも一度決まると一年間変更はないらしい。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「じゃあ、魔桐君を推薦します！」

「ちよつ、ちよつと待った！俺はそんなのやらな」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

キリヤは嫌じゃないのですか？

俺は昔よくやってたからな。別にいいよ

「待つてください！納得がいきませんわ！そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥曝しですわ！実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿とされては困ります！」

またこいつか。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

鬱陶しい。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

やってしまったな

はい

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い
いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこの
わたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会です
わね！」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課
後、第三アリーナで行う。織斑と魔桐とオルコットはそれぞれ用意
をしておくように」

さて、どうオルコットを潰そうかな。

2話

「うっ……」

放課後、一夏は机の上でぐったりとうなだれていた。

「大丈夫か？」

「な、なんとか」

教室の外では、放課後と言えど状況があまり変わっていない。むしろ、ひどくなっている気がする。

「ああ、織斑さんと魔桐くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい」

呼ばれて向くと、副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言っつて部屋番号の書かれた紙とキーをよこす山田先生。

「俺の部屋、決まっていなかったですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど。霧夜は？」

「俺もだけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです」

なるほど。保護と監視の両方をつけるためか。

「そう言うわけで、政府特命もあつて、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。一ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

「部屋はわかりましたけど、荷物は一回帰らないと準備できないですし、今日は帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

ああ、この声は

チフユですね

しかないよ

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう。魔桐は切嗣が送ってきた」

「わかりました」

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七

時、寮の一年生用食堂でとってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、二人は今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

馬鹿かこいつは。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

「おつ、織斑くんつ、女子とお風呂に入りたいんですか！？」

「い、いや、入りたくないです」

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それはそれで問題のような」

なにか履き違えているよいな。

「魔桐、明日今日の放課後にISの稼働試験を行う。詳しいことは追って連絡する」

「わかりました」

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑くん、魔桐くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

いや、校舎から五十メートルぐらいしかないのに、どうやって道草をくえと？

「ふー……」

千冬さんと山田先生が教室から出て行くのを見送って、一夏はため息混じりに立ち上がった。

「行くか」

「おう」

俺たちは足早に、部屋に行った。

「えーと、1026室は……ここだな」

部屋番号を確認して、ドアに鍵を差し込んで開ける。

部屋に入ると、まず目に入っただのは大きめのベッド。それが二つ並んでいる。

「いいよ、セイバー」

「はい」

ネックレスが光り、光りが消えると金髪の少女が現れた。俺の相棒

のセイバーだ。服装はF a t e / s t a y n i g h tの私服だ。

「セイバー、明日は稼働試験があるから頼むぞ」

「はい」

「サーヴァントの気配は？」

「それらしいのはまったく。使い魔の気配もありません」

「そうか。お疲れさま。もう休んでいいよ」

「わかりました」

俺もさっさと片付けて、寝よう。

何かが突き刺さったような音がしたけど無視だ。

3話

「なあ……」

「……………」

「あいつら入学早々喧嘩か？」

昨日のあの音は気のせいじゃなかったのか。

ちなみに俺は二人の様子を見ながら、朝食を食べている。

「ねえねえ、彼らが噂の男子だつて」

「なんでも左の人は、千冬お姉様の弟らしいよ」

「えー、姉弟揃ってIS操縦者かぁ。やっぱり彼も強いのかな？」

昨日から変わらず、一定の距離を保ちつつも周りにいるだけ。

「ま、魔桐くん、隣いいかなっ？」

「ん？」

見ると、朝食のトレーを持った女子三名が、俺の反応を待ちわびるが如く立っていた。

「別にいいよ」

そう言っていると声をかけてきた女子は安堵のため息を漏らし、後ろの二

人は小さくガッツポーズをしている。

「あゝっ、私も早く声かければよかった」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

三人組はすでにどう座るか決めていたのか、非常にスムーズに席に着いた。

「魔桐くん、月曜日のクラス代表決定戦大丈夫なの？」

どうやら、イギリスの代表候補生であるオルコットにハンデをもらわずに、戦えるのかと思っているのだろう。

「大丈夫。俺の相棒は強いからさ。じゃあ、また教室で」

さっさと食事を終わらせ、教室に行く。

三時間目まで順調に終わり、今は休み時間。

一夏の周りに女子が集まり、質問大会がはじまっていた。

ハアンッ！

「休み時間は終わりだ。散れ」

いつのまにかきていた千冬さんが、宝具出席簿（破壊すべき漆黒の本）で一夏の頭を叩いた。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園から専用機を用意するそうだ」

「???」

一夏がちんぷんかんぷんでいると、教室中がざわめいた。まあ、予想通りだな。

キリヤは最初からこうなると予想していたのですか？

まあな。一夏は前例のない男のIS操縦者だ。データ採取を目的として専用機を与えるのだろう

一夏の専用機ってどうなるんだ？たぶん近距離格闘型装備を主体とした機体だろうなきっと。

「あの、先生。篠ノ之さんと魔桐くんって、もしかして篠ノ之博士と魔桐博士の関係者なんでしょうか……？」

なんか勝手に話が進んでいるんだが。

イチカが教科書六ページを音読したからです

そういうことか。まあ、篠ノ之や魔桐なんて名字、そうそうないしな。

「そうだ。篠ノ之は篠ノ之束の妹で、魔桐は魔桐双夜の弟だ」

束さんと姉さんは今超国家法に基づいて現在指名手配中なのだ。束さんは連絡はつく。けど、姉さんは九年前に失踪してから、一切連絡がとれないのだ。どこにいるんだろう。

「ええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が三人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「魔桐くんも天才だったりする！？今度ISの操縦教えてよっ」

授業中だというのに、俺と篝の元にわらわらと女子が集まる。おい一夏、見てないで助けるよ。

「あの人は関係ない！」

突然の大声。教室中の女子がフリーズした。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言つて、篝は窓の外に顔を向けてしまう。群がっていた女子は困惑や不快を顔にして席に戻った。

「さて、授業をはじめろ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

山田先生も簿が気になる様子だったが、そこはプロの教師。ちゃんと授業をはじめた。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

また来たよ。面倒だ。

「まあ？一応勝負は見えていますけど？さすがにフェアではありませんものね」

「？なんで？」

「あら、ご存知ないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわたくし、セリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持っていますの」

「へー」

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思ったただけだけど。どうすげーのかはわからない

いが」

「それを一般的に馬鹿にしていると云うでしょう!？」

こいつの相手をするのは面倒だから、先に学食に行った。

「ねえ。君って噂のコでしょ?」

昼食を食べている途中に、隣から女子に話かけられた。リボンの色が赤だから三年生か。

「そうですけど」

「代表候補生のコと勝負するって聞いたけど、ほんと?」

「はい、そうですけど」

情報が回るの早いな。

「でも君、素人だよね? IS稼働時間いくつくらい?」

「少なくともあなたより長くはやってますよ」

「それってどういこと?」

「秘密です」

と言うと、先輩は顔を赤くして行ってしまった。風邪でもひいたのか？

キリヤのせいです

なんで？

自分で考えてください

どういうことだ？わからん。

「魔桐」

「はい」

昼食を食べ終わり、教室に戻ろうとしたところに千冬さんと出くわした。

「今日の放課後、第二アリーナだ。遅れるなよ」

「了解です」

第二アリーナA・ピットで準備していた。

「魔桐。お前の相手の山田先生はああ見えて元代表候補生だ。気を抜けば負けるぞ」

「はい」

元代表候補生か。たしか学園の教師ってそういう人がたくさんいたんだっとな。

「霧夜」

「はい」

学園内で名前で呼ぶなんて珍しいな。

「修行の成果、見せてもらっぞ」

「了解」

行くよ、セイバー

はい

セイバーを展開して、髪の色と目のが変わる。

「行きます!」

ゲートが開放して、ピットが出る。
アリーナでは、ラファール・リヴァイヴに乗った山田先生が待機していた。

「魔桐……くん、ですよね？」

「はい、そうです」

どうしたんだろう。まあ、どうでもいい。

「はじめましょう。あと山田先生」

「はい」

「本気でてくださいね。じゃないと」

死にますよ。

瞬時加速で、間合いを詰めカリバーン（勝利すべき黄金の剣）を呼び出し、振るう。

「きゃあ！」

風王結界で不可視になっていて、山田先生は避けることができず、地面に叩き落とされた。

「言っただけですよ。本気でてくださいって」

山田先生が落ちたところに近づいて、様子を見る。

「終わりですか？」

「まだです」

自分がいたところに、グレネードを落として、その場を離脱してグレネードが破裂した。

「スモークか。敵はどこだ」

百メートル上空です

風王結界の風で、煙を払いのけカリバーンを山田先生に向けて投げた。

不可視だから、見えずついていたグレネードランチャーを斬った。

「くっ！」

即座にアサルトライフルを呼び出し、撃つ。

「ぜらあああっ！！」

加速して、接近する。できる限りあたらないように、接近。山田先生は殴ってくると思って、近接ブレードを呼び出し迎え撃つ。

「甘い」

「！？」

腕の装甲から、レーザーサーベルをだし、斬撃をくらわし蹴りで叩き落とす。そのついでに落ちてきたカリバーンをキャッチする。

セイバー、真命を開放する

はい

「風王結界解除」

カリバーンに纏っていた風が消え、カリバーンが姿を現す。

「真命開放」

瞬時加速で、俺と山田先生との距離が一瞬で詰まる。

「『カリバーン（勝利すべき黄金の剣）』！」

至近距離でのカリバーンの一撃をもろにくらって、ラファールのシールドエネルギーが尽きた。

「……………」

「……………」

山田先生は全く動かない。

……………やりすぎた………かな？

……………やりすぎです

あれでもだいぶ威力を抑えたんだけど……………。

「運ぶしかないよな」

気絶した山田先生を抱えて、ピットに戻った。
戻って、「やりすぎだ、馬鹿者」の一言と主席簿（宝具）の一撃を

受け、真名開放と風王結界、カリバーンのことを話した。ちなみにそのすぐ後に山田先生が復活した。

「疲れた」

夕食を食べ部屋に戻り、シャワーを浴びて、即行でベットに入った。一夏は、箒と剣道の練習をするらしい。

「キリヤ、髪を乾かします。起きてください」

「……わかった」

実体化したセイバーが右手に櫛、左手にドライヤーを持って俺の髪を乾かす。というか櫛とドライヤーはどこから持ってきた。

「拡張領域からです」

いつものまに入れてたんだよ。別に新しく何かを拡張領域に入れる気はないけどさ。

「終わりました」

「ああ。ありがとう、セイバー。おやすみ」

「おやすみなさい。キリヤ」

今日はあっさりとすぐに眠れた。稼働試験のせいなのだろうきっと。

4話

翌週、月曜日。一夏とオルコットとの代表決定戦の当日。

「さて、行きますか」

代表決定戦、一試合目の一夏対オルコットの試合は一夏の負けで終わった。

どうやら、白式の唯一の武装、雪片式型の特性を知らずに使ったせいで雪片の特殊能力である、バリアー無効化攻撃で自分のシールドエネルギーを使い果たしたらしい。

「霧夜。その手は？」

右手の包帯を外し、手の甲にある令呪（切嗣のと同じ）が一夏の目にはいる。

「これは令呪って言ってな。こいつを扱う資格があるって言う証だ」

セイバー、準備はいいな

はい

セイバーを展開して、髪が金髪に変わり、瞳が翡翠色に変わる。

「……………」

「ん？どうした？」

「いや、その状態だとよけいに」

「女ばく見える」

そんなに？

はい。女ばいです

どうしよ。やっぱり今度切ろうかな。

ダメです

わかったよ。

「よし、行ってくる」

「負けんなよ」

「負けたやつが言つな」

ピットを出て、地上で待機する。

「お待たせしましたわ」

B.ピットからオルコットとブルー・ティアーズが出てきた。

「待ってない」

「魔桐さんですの?」

「そつだ。はじめるぞ」

試合開始のブザーはすでに鳴っている。

「ええ、行きましたよ」

ブルー・ティアーズの主武装であるスターライトmk-?からレーザーが放たれる。

「「「!?!?!」」」

俺はそれを風王結界で不可視となったカリバーンで、打ち消した。オルコットや他の女子から見ると、手を振っただけでレーザーが打ち消されたように見える。

「ウイングスラスター展開」

ウイングスラスターを展開して、PICで浮遊する。

「その手に持っているのは剣ですか?」

「さあ、なんだろうな。斧、槍、いや、もしかや弓ということもあるかもしれないぞ。あと、俺を絶対に間合いに入れるな。じゃないと」

瞬時加速で間合いが一瞬で詰まる。

「負けるぞ」

カリバーンで斬り、叩き落とす。

「くっ！」

すぐさま体勢を立て直して、ビットを飛ばす。

キリヤ、あれは

イギリスの第三世代型兵器、ブルー・ティアーズか

理論値最大稼働時はやっかいだけど、こいつの場合はどうかな？

「まだ理論値最大稼働には至らないか」

迫りくるレーザーを避けるか、カリバーンで打ち消す。

確かビットは六機だったな

はい。レーザービットが四機。ミサイルビットが二機です

「先にビットを壊す」

一番近いビットをカリバーンで両断。

次に二機目のビットを蹴りで軌道を変え叩き斬る。

「これで二機」

飛んできた二機を回転切りで二機とも破壊する。

「なあ、オルコット。不可視の武器って便利だと思わないか？」

「なにが言いたいののですの？」

「こっやってさ」

カリバーンを収納して、カリバーンを持っているふりをして、瞬時加速でオルコットの目の前まで移動する。

「フェイントに使えるところがさ」

といいながら、カリバーンを持ったふりをして、右手を振る。ダメージがないく呆気にとられる。

「！？」

「遅い」

我に返り、対応するがもうすでに遅く、レーザーサーベルでミサイルビット二機とスターライトmk-?を破壊する。

「さあ、どうする？このままだと死ぬぞ」

「くっ、インターセプター！」

武器の名前を呼んで、近接用のブレードを出す。ちなみに声をだして武装を呼び出すのは初歩であり、代表候補生のオルコットにとっては恥ずかしいのだろう。

「行くぞ。風王鉄槌ッ！」

ストライク・エテ

旋を巻く大気の中に、閃き踊る黄金の燦然。

聖なる宝剣を守っていた超高压縮の気圧の束が、不可視の帳という縛りから解放たれてさながら猛る龍神の咆哮の如く、轟然と迸る。ただ一撃にして必殺の秘剣。宝具『インヴェシブル・エア風王結界』の変則使用。使い方によっては、踏み込みの再加速のために放たれる超突風だが、敵に向けて撃ち放てば万軍を吹き飛ばす轟風の破碎槌となる。

「きゃあ!？」

だが、リミッターをかけているため体勢を崩させるほどしかないが、そこに隙ができた。

「これで、終わり」

カリバーンでの連続切りで、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが尽きた。

『試合終了。勝者

魔桐 霧夜』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9703z/>

IS インフィニット・ストラトス 転生者と騎士王

2012年1月5日19時53分発行